

論理的で正確な英文を書くことを目指す学習指導について

—生徒の「気付き」を促すエッセイ・ライティング指導を通して—

長期研究員 荒木 朋典

《研究の要旨》

本研究では、生徒が書く英文が論理的で正確なものになるように、生徒が英語を使う機会や対話的に学習する場面を計画的に設定し、生徒の「気付き」を促す手だてに基づいて、エッセイ・ライティング指導を行った。そして、この指導法が生徒の書いた英文の論理性と正確性に及ぼす効果を、事前、中間、事後テストから検証した。その結果、論理性と正確性に効果が認められ、生徒の学習意欲向上にも一定の効果があることが分かった。

I 研究の趣旨

中央教育審議会答申（平成28年12月）では、「中・高等学校においては、〔中略〕外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分に行われていない」ことが指摘されている。このことから、生徒が授業で英語を使う機会を増やし、英語で自分の考えを発信する力を伸ばすための効果的な指導法の研究が必要だと考える。

自らの指導を振り返ると、生徒が英語で自分の考えを発信する機会は確保していたものの、特に、エッセイ・ライティング指導において、生徒が書く英文の論理性と正確性に課題があった。

第二言語習得の先行研究においては、アウトプット（「話すこと」、「書くこと」）により生じる、学習者自身及び他者からのフィードバックが、学習者の語彙、文法や語法の問題に対する「気付き」を促し、第二言語の発達を促進する効果があることが実証的に示されている（Swain & Lapkin, 1995）。

そこで、本研究では、文法や語法の正確性だけでなく論理性にも焦点を当て、生徒相互のフィードバックや話し合い、教員による直接、間接的な添削を併用する。これにより、生徒の「気付き」が促され、生徒が書く英文の論理性と正確性が向上するかを研究することとする。

II 研究の概要

1 研究仮説

生徒が英語を使う機会や生徒同士で話し合う場面を計画的に設定し、生徒の「気付き」を促すことに重点を置いたエッセイ・ライティング指導を行えば、生徒が書く英文が論理的で正確なものになるであろう。

2 研究内容

(1)【手だて1】エッセイの特徴に気付かせる英文の分析
生徒のエッセイに共通する課題を含む英文と模範解答を作成し、生徒相互に分析させる。これにより、解決

すべき課題や英文エッセイ特有の文章構成に気付き、論理的な英文を書くことができるように促す。

(2)【手だて2】採点者の視点をもたせる生徒相互の評価

互いのエッセイを読み合い、評価規準（図1）に基づいて評価し合う。これにより、書く過程で、採点者の視点で自分の英文の構成や内容に着目しやすくなり、論理的で説得力のある英文を書くことができるように促す。

観点		チェックポイント	
論理性	構成	英文エッセイ特有の文章構成で書かれているか？	
	内容	①	トピックに対する意見が述べられているか？
		②	意見に対する理由が2つ以上あるか？
		③	理由に対する説明や例が具体的か？
	④	内容に一貫性があるか？	

図1 生徒用に作成したエッセイの評価規準

(3)【手だて3】生徒の実態とニーズに応じた教員の添削

生徒の実態に応じ、誤りを直接訂正するだけでなく、誤りに気付かせるヒントを与える方法でも添削する。また、生徒が添削を望む箇所を明示させ、そこに焦点を当てて添削をする。これにより、生徒が自らの知識不足、誤りの理由等に気付き、文法や語法の誤りが少ない正確な英文を書くことができるように促す。

(4)【手だて4】論拠の明確化を目指す生徒相互の検討

ワークシート（図2）を使い、提示された主張と結論に合う理由と具体例を生徒相互に検討させる。これにより書く前に考えを整理する必要性に気付き、論理的で説得力あるエッセイを書くことができるように促す。



図2 ワークシート例

(5)【手だて5】学びをつなぐ書き直しの時間の設定

前時までの学習や添削内容を振り返り、エッセイを書き直す時間を設定する。生徒の学びをつなげることで文法や語法の誤りや知識不足に気付き、文法や語法の誤りが少ない正確な英文を書くことができるように促す。

3 研究の実際

(1) 研究対象

普通科第3学年文系選択科目「英語会話」選択者13名

(2) 基本的な授業展開

単元の内容に関して、聞く、読む、話す活動を行った上で、扱った内容に関連するトピックについて自分の考えを書く活動(15~20分)を行った。また、本研究では、「つなぐ(Connect)」「使う(Use)」「繰り返す(Repeat)」「励ます(Encourage)」という“CURE”の視点で生徒理解と教材研究を行い、対話的な活動場面を多く設定し、生徒の「気付き」を促すように授業を展開した。

(3) 前期授業実践

①【手だて1】エッセイの特徴に気付かせる英文の分析

生徒のエッセイで多く見られた課題を含む英文と模範解答を作成し、生徒相互に分析させた。これにより、課題を含む英文からは、「内容に一貫性がない」「Iが主語の英文が多い」「一文ごとに改行している」等の気付きが見られた。また、模範解答からは、「段落分けがされている」「‘For these reasons’のような決まった表現が使われている」等の気付きが見られた。まとめとして、英文エッセイ特有の文章構成を説明し、“OREO^{*1}”の順序で書く方法を紹介した。

※1 英文エッセイ特有の文章構成を、Opinion「意見」、Reason「理由」、Example「具体例」、Opinion「意見(再提示)」のように簡略化したもの

②【手だて2】採点者の視点をもたせる生徒相互の評価

エッセイを書いた後の5~10分で、生徒がペアでエッセイを交換して読み、評価規準(図1)に基づいて互いに評価した。生徒は、評価する責任を感じている様子で、評価規準を一つ一つ丁寧に確認しながらエッセイを読み、相手の意図を正確に読み取ろうと真剣に取り組んでいた。また、相手の評価に対して不明な点があれば、その理由を確認する意見交換の様子も見られた。さらに、教員より生徒相互にエッセイを読み合うことが、生徒にとってよい刺激になり、言いたかったのに言えなかった表現を調べたり、質問したりする意欲的な姿が見られた。

③【手だて3】生徒の実態とニーズに応じた教員の添削

文法や語法の誤りを中心に、生徒の実態に応じて方法や視点を変えて添削した。例えば、文法の知識が不足している生徒には、誤りを直接訂正する方法、知識はあるが不注意等による誤りが見られた生徒には、下線と日本語のコメントによる間接的な方法で気付きを促した。また、生徒の要望に応える添削を行うために、まず、生徒自身に模範解答を基に添削させ、その後で、生徒が添削を希望する箇所一つに下線を引かせ、そこだけを添削する方法も取り入れた。さらに、生徒がエッセイを書いている間、生徒のつまずきを把握し、語彙や表現等を板書して全体で共有できるようにした。これにより、書く意

欲をなくさずに粘り強く取り組む姿が見られた。

(4) 後期授業実践

前期授業実践で、生徒の書いたエッセイには、主張を支える論拠が抽象的で不明確、前時までの学びが生かされていないという課題が残った。そこで、後期授業実践では、新たに二つの手だてを導入した。

①【手だて4】論拠の明確化を目指す生徒相互の検討

トピックに対する主張と結論は示されているが、理由と具体例を書く部分が空欄になっているワークシート(図2)を使い、生徒相互に検討する活動を行った。これにより、前期では、「大切だから」や「役立つから」等の抽象的な理由だけを書いていたが、その理由に対する具体例を書いたエッセイが増えた。また、論拠を明確にするためには、エッセイを書く前に考えを整理する必要があることにも気付き、書く前に構想する姿も見られた。

②【手だて5】学びをつなぐ書き直しの時間の設定

エッセイを書いた次の時間に、前時までの学習内容や添削内容等を振り返る時間を設定し、それらを基に書き直しをさせた。授業の中で振り返る時間を設定したことで、学習内容や添削内容について互いに確認する様子が見られた。これにより、学習内容を繰り返し確認することが知識の定着に効果があることに気付き、学びのつながりを意識することができるようになった。

4 書く力の検証

(1) 検証方法

前期及び後期授業実践で、生徒は合計14本のエッセイを書いた。このうち、事前、中間、事後テスト(図3)では、トピックを似せてテストの妥当性を高めた。テストは25分で行い、辞書の使用は一切認めなかった。

事前テスト	High school students should be allowed to use their smartphones at school. What do you think about this statement?
中間テスト	High school students should work part-time. What do you think about this statement?
事後テスト	High school students should take part in club activities. What do you think about this statement?

図3 テストで扱ったエッセイのトピック

資格・検定試験のライティング問題の採点基準を参考に、本研究における「論理的な英文」を以下のように定義(図4)、論理性を検証した。

本研究における「論理的な英文」とは、英語のエッセイ特有の文章構成に従って、以下の①、②の内容を含む英文のこととする。
① 与えられたトピックに対する自分の主張が明示されている。
② 自分の主張を裏付ける理由と、その説明や例が具体的に示されている。

図4 本研究における「論理的な英文」の定義

この定義を基に採点基準(図5)を作成し、4人(協力校英語科教員2人、ALT1人、授業者)が9点満点で採点した。4人の採点者が同様に採点できているかをクロンバックの α 係数^{*2}で算出した結果、信頼性が確保

されていた ($\alpha =$ 事前0.85, 中間0.72, 事後0.92)。

※2 一貫性による信頼性を見る係数。通常 $\alpha = 0.8$ 以上が望ましいとされているが、0.7以上で一般的に許容できると考えられている。

項目	配点	項目に関する具体的内容 (以下は3点の例)
主張	0~3	与えられたテーマに対する自分の主張がきわめて明確に示されている。
理由と具体例	0~3	書かれている理由(2つ以上)は主張を十分に支持するものであり、それぞれの理由に対する具体例や説明も適切である。
文章構成	0~3	英語のエッセイに特有な文章構成になっており、全体的に英文のつながりが分かりやすく、一読してその内容を完全に理解することができる。

図5 エッセイの採点基準の例(抜粋)

テスト結果の検証は、論理性と正確性の2観点から行った(図6)。事前、中間、事後のそれぞれで算出された数値の差に有意差があるか否かをt検定※3により確認した($p < .01$)。また、補足データとして、エッセイ中で使用されている単語の総数を総語数として算出した。

※3 二つの試験における平均点の間に、統計的に有意な差があるかを見る検定

観点	算出方法
① 論理性	生徒が書いたエッセイを、作成した採点基準に基づいて4人の採点者が9点満点で採点したものの平均値。採業者が採点結果を集計し算出した。
② 正確性	生徒が書いた英文に含まれるすべての節において、誤りが一つもない節の割合。採業者が数えて算出した。

図6 論理性と正確性の算出方法

(2) テスト及び検定の結果

テスト及び検定の結果は、以下のとおりである(図7)。

テスト	論理性 (0-9)			正確性 (0-1)			総語数 (補足)		
	事前	中間	事後	事前	中間	事後	事前	中間	事後
平均値	4.35	5.02	6.52	0.42	0.52	0.56	78.1	78.5	104.8
最高値	6.25	6.50	8.75	0.73	0.93	0.83	98	101	129
最低値	2.75	3.50	4.00	0	0.27	0.25	41	35	85
標準偏差	1.17	0.83	1.26	0.23	0.21	0.18	16.0	16.6	15.2
有意差 ($p < .01$)	有 ($t = -3.32$)			無			無		
	有 ($t = -7.03$)			有 ($t = -4.53$)			有 ($t = -6.12$)		
	有 ($t = -5.43$)			有 ($t = -4.53$)			有 ($t = -5.46$)		

図7 テスト及び検定の結果 (n=13)

(3) テスト結果及び質問紙調査結果の検証

① 論理性についての検証

エッセイの特徴に気付かせる英文の分析【手だて1】、生徒相互の評価【手だて2】、論拠の明確化【手だて4】により、生徒は論理的な英文を書くことができるようになった。その結果、論理性は、事前から事後にかけて平均値が一貫して上昇し、大きく数値を伸ばすことができたと考える。特に、OREOに対する生徒の有用感が高く、質問紙調査では、13人全員が「エッセイを書く時に、OREOの流れを意識している」と回答している。

② 正確性についての検証

正確性は、事前から事後にかけて平均値が有意に上昇したが、ゆるやかな変化であった。これは、生徒の語彙、文法や語法の知識量は短期的には大きく変化しないことが理由だと考える。しかし、教員の添削【手だて3】や書き直し【手だて5】により生まれた、自分の誤りや知識不足への気付きから、英語学習に対する意欲を高める

ことにつながり、少しずつ数値に表れたと考える。

③ 総語数についての検証

事前では平均値が78語であったが、事後では104語に達し、最高値も129語であった。中間では最低値が35語だったが、事後では85語に達し、全体的に大きく伸びた。これは、限られた時間の中でアイデアを整理し、エッセイを書き上げる練習を重ねた成果だと考える。

④ 生徒の「気付き」を促す指導法についての検証

本研究では、対話的な活動場면을計画的に設定し、生徒の「気付き」を促す中で、生徒から出た言葉を拾い集め、促したい「気付き」へと導くことが難しかった。しかし、質問紙調査で生徒が書いた感想(図8)では、対話的な活動、英語を使う場面設定、生徒の「気付き」を促す各手だてに対し、肯定的な意見が多く見られた。このことから、本研究で実践した生徒の「気付き」を促す指導法に対する生徒の有用感が高かったと考える。

○他の人と意見を交流することで、違う角度から物事についてみる力がついた。
○文章を論理的な文章の型に沿って書くようになった。
○英語の文章を書くことに対し苦手意識が減り、実際に記述の模試でも長文を書く問題に得点源だと思って積極的に取り組めるようになった。
○C英や英表の授業の際、英語会話で学んだ内容と同じところが出る英文が理解しやすくなったし、文章を読みやすくなった(意識するようになった)こと。
○初めに授業を受けた時よりエッセイの力が上がった気がする。だんだん書ける内容も増えてきて書くことが苦じゃなくなった。
○自分たちで考えて発表したりする授業がとても楽しかったし、理解が深まりました。
○エッセイを書く時の順番が分かりました。単語力、文法力を深めていきたいと思った。
○英作文の添削などでたくさんアドバイスをいただけるので少しずつ使える表現が増えました。
○リスニングやスピーキングなどの授業もあり、様々な面で英語の力をつけることができました。
○自分たちで考えたりペアで活動する授業で発言力が身についたと思います。
○一回一回のエッセイに細かなアドバイスをくださり、やる気が上がりました。
○解説と自分達で考える時間のバランスがよかったので身になる授業だった。
○英語の勉強の仕方が変わった。OREOを意識して書くようになった。

図8 生徒の感想(生徒記述のとおり)

III 研究のまとめ

1 研究の成果

生徒の「気付き」を促すことに重点を置いて各手だてを講じたことで、生徒が書いた英文において、論理性に関しては大きな伸びが見られ、正確性に関してもゆるやかだが着実な向上が見られた。また、総語数の増加からは、英語で自分の考えを表現できるようになりたいという意欲の向上が感じられ、生徒の学習意欲を高めることにも一定の効果があったと考える。

2 今後の課題

「書きたいことはたくさんあるのに、英語で書けない。」生徒は、日本語で様々なことを考えているが、それらすべてを自分が知っている英語で表現することは難しく、書いた内容が稚拙になってしまうことがあった。そこで、本研究での成果を生かしながら、長期的な見通しをもって生徒の学びを積み上げていき、「生徒が書く英文の内容の質を高めること」に焦点を当てた指導法を研究していくことが、今後の課題であると考えられる。